

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

出で湯にて指先すべて皺^{しわ}できて見ればそれぞ
れわが顔である 生駒市 宮田 修

〈評〉発想がユニークで面白い。指先のし
わが「それぞれわが顔」とはそんな見方も
あるかと感心した。作者は温泉好きらしい。

看板の文字の「すすく」に立ち止まる私の
内ない響き 福岡市 山下 朝音

〈評〉「すすく」が何の看板だったか知
りたくなるが、ポイントは鋭い下の句だ。
やわらかな落雁^{らくがん}は口ほどかれて自由をわれ
に教えてくれる 狭山市 りんか

日常を不意に踏み外す昨日まで鍵をかけたか
気にならなかった 東京 遠野 鈴

後悔を並べて幾度もめくっては終わりのない
神経衰弱 奈良市 久保 祐子

賞味期限きれた牛乳飲んでる当直あけの医
局のソファ 所沢市 里見 脩一

百年に一度の風吹いたとてペース乱さぬ朝の
囀^{ささや}り 東京 夏目 そよ

渴いたと感じる前に飲む水に戦地の子らの目
が映ってる 鳥取市 中之島 潤

戦争を未だ続けるブーチンをあの世で待てる
百万の死霊 豊後高田市 野上 明範

振り出しに戻れず上がることもなく右往左往
の令和の双六 秋田 三浦 政博

米川千嘉子 選

静かなり冷たくなりゆく手を握り嫁姑^{あしやめ}の終
わる薄暮は 奈良 島 眞澄

〈評〉養母の最期をみとる作者。必ずしも
良好とは言え切れなかった関係も思われる
が、それを含めて何かを見届けたのだ。

これをしたらしなかったらきみを見損なう 予
告したから傷つかないで 東京 遠野 鈴

〈評〉「」を使ったユニークな一首。傷
つのは「きみ」ばかりではないのかも。

古渡りの更紗の日傘風吹けばジャワの市場の
シナモン香る 北九州市 松尾あけみ

新しいパソコンを買う日曜日パスワードを書
くメモ帳作る 千葉市 佐藤 綾子

ご当地麺とテレビに映る魚うどんをうとまし
く思ったばあちゃんの家 日南市 宮田 隆雄

匙添えて熱柿出てくるおやつとき老人ホー
ム午後のやすらぎ 大阪市 辻井 康祐

「頑張れよ」と励ましてくれる医師は今日急患
治療で代診となる 八千代市 戸 光代

不具合のスマホの直し方を訊く妻の写メー
ル娘に送り 西海市 まえだいつき

ジン・ハックマン好きで観るフレンチ・コネク
ション2 恵は紳士だ 生駒市 奥田 充子

御自分は真白なりやと見てをりぬこそとば
かり人責める人 四日市市 坂倉 侶子

加藤 治郎 選

ニユースは不幸ばかりを流し天井に生まれたばか
りのカマキリ みどり 宮古島市 塩見 伴

〈評〉不幸に満ちている世界から離脱した
いのだろう。新しい生命を見つけた喜びを
歌った。まぶしいみどりだ。リノ音が響く。

MTの免許を取れる人間とMT免許を取れな
い人間 豊橋市 氏原 維持

〈評〉手動のギアチェンジは難しい。ここ
に人間の二つのタイプを見いだしたのだ。

扇風機の風は優しいこのまんま変わらないま
んま生きられないの 東京 畑 えな

君だけが夏を終わって私だけだまし絵の中夏
に佇む 名古屋 外山 雪

砂浜の穴の数だけ蟹がいるおれはひとりりで周
りは蟹だ 春日井市 月夜の雨

このうどん焼きうどんにも出来ずとスーパ
ーでひとりごちる青年 東京 嶋村 純

好きだった人をみかけたもう古い古墳のよう
にすかな夜風 東京 石井 しい

生ぬるい月光溜まり 水曜がまだ体から出よ
うとしない 大津市 世田 夏雪

お母さんと呼び名をかえることできずママのま
んまで気ままに暮らす 狭山市 りんか

引越しの最後に傘をコンビニに忘れたふりで
街にお別れ 熊本市 夏風かをる

水原 紫苑 選

濡れながら懐かしく聴くふいに降る雨はあな
たの、死者たちの、声 宮古島市 塩見 伴

〈評〉あなたという人が死者たちを犬のよ
うにたくさん飼っていたのだろうか。彼ら
が不意の雨として叫び出すのだろうか。

溶け出せる永久凍土の底いから人の耐ええぬ
ものがいでくる 東京 野上 卓

〈評〉永久凍土が溶けたら、すべての人間
の罪が見えるのか。

秋空を思いのままに飛んでいる蜻蛉^{せんだ}とともに
暮れてゆく町 北名古屋 月城 龍二

0という穴から出よう空き缶の奥にも星は流
れているさ 横浜 安西 大樹

青い実をついばむやうに頤をあなたの肩に
止まらせてゐる 高島市 くらたか湖春

咲く色を決めかねている花たちが熱心に読む
ひかりの粒子 東京 石川 真琴

ちらばった硝子のかけらみづの夢みなもくた
けてをりし夕べに さいたま市 青木 喼

全面を虹に取り付かれた瞳かと思つたらシャ
ボン玉だよ 枚方市 久保 哲也

私のすべてを覚えてほしいはずもなく月に扶
れた空すすくして 横浜 永永 キヌ

クリスマス 道端で眠る人形に透明な毛布か
かる次々と 横浜 砂月 七

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051（住所不要）毎日新聞学芸部。短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから
投稿できます